

図表 9 (実地研修 - 研修生レポート／一部抜粋・語調整)

実地研修レポート (研修生)

■ 研修生レポート (1)

研修内容 (概要)

研修内容: 訪問支援における注意点や実際について
適応指導教室の訪問①～④

< 訪問支援について >

訪問支援を行うにあたって支援員の経験をもとに説明を受けた内容を以下にまとめます。

・ 訪問するまでの手続き

家庭から学校に訪問カウンセラーの依頼

↓

学校から教育相談センターへ要請

↓

カウンセラーが学校に行き担任などから情報の聞き取り

↓

カウンセラーが学校に行き保護者から情報の聞き取り

(ここでは担任や管理職は同席しない)

↓

訪問開始

・ 手続きの意味

アセスメント (子どもの今と子どもを支える環境を疑似体験する)

学校及び家庭それぞれと関係を作る

学校との連携、立場を明確にする (カウンセラーの孤立を防ぐため)

・ 訪問してからの流れ (内容・ソフトを作る)

訪問初回

自己紹介をする

ここでは、子どもの「誰? 何?」にできるだけ答える。

できるだけ子どもの不安を軽減するよう試みる。何か役に立てたらという思いを持って全ての事を試みるも、子どもによっては、それが伝わった方が良い子どもと最初にそれが伝わらない方が良い子どもがいる。伝わる配分の調節が必要。

家という子どもの安全地帯に飛び込む危険性

ふるえている子ども、「ぶっ殺すぞ」と叫ぶ子ども、床を叩く子ども etc

親のいない2人きりという閉鎖的な環境

ハラスメント

冤罪、犯罪 etc

徐々にゆっくり

最初は自己紹介だけで良い

過剰反応の子ども (初回に飛ばしすぎると後で子どもが疲れてしまう)

約束した時間だけ訪問 (短くても良いが、延長しない)

会っても会わなくても良い

・ 会えない時

できるだけすぐに家を後にする。保護者と玄関先で話すことはしないこと。話が必要な場合

は、改めて日・場所を設定する。(事前に保護者面談の際に伝えておくと良い)

会えなかった日に書き置きや手紙を置いていき、反応を保護者から聞く。

物を壊す、家庭内暴力などの行動が見られるときは、訪問を控え、保護者の相談機関を紹介する。

・支援者と当事者＝ドラえもんとのび太の関係

なぜのび太の家に喜んで迎えられているのか？

→役に立とうとすること、定期的にくること、連絡がつくこと

・四次元ポケットの道具は何のため？

ドラえもんは四次元ポケットがある（無かったらただの友だち）から「こいつは役に立つ（頼れる）」と思われている。

子どもと体験や時間を共有する

助けてあげる（甘やかす）だけではなく、ドラえもんはいつものび太に言うセリフがある。（「君はそれで良いのか？」）

楽な方が良い。目先の苦痛から逃れられればハードルが具体的でもそれに対峙するのは怖い。

道具は出すが、手を出さない

→やりすぎない。伴走するように。

・カウンセラーが離れる時

回復、復帰は少しずつ、子どもの「もう大丈夫」を信じきらないこと。

突然離れていく時もある。カウンセラーにわざわざ感謝しない。

・カウンセラーが訪問するという視点に限定した限界

比較的重い精神疾患患者（統合失調症、摂食障がいなど）またはそう疑われる子ども

療育者と子どもの関係で、療育者の病理が重い場合

思春期の女性

福祉的なサポートが必要な家庭（ここへの訪問は、学校担任・ソーシャルワーカー・保健師、児童相談所相談員などの立場が良い）

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

不登校・引きこもり児童・生徒の通級までの流れ

相談センターに連絡→通級希望→保護者面談→見学→4教室を選択できる。→希望教室で仮通級1～2か月→本通級登録

不登校児にとっては、自宅周辺よりも遠方ではあるが、知人のいない、顔の分からない地域に通級できるので良い方法ではある。しかし、小学生は保護者の送迎が必須。中学生は自力通級としており、保護者の都合で送迎が難しい児童がいるとのこと。

通級希望のない不登校児童については、学校から相談センターへ依頼が来る。相談センターから自宅へ連絡。希望があれば、訪問を行う。（昨年度は3名の希望者があり、福岡氏が訪問をしていた。今年度は希望者が0名）

千葉県・市・町でそれぞれ、訪問相談員を配置して、引きこもりや不登校生に対して、通級・学校復帰へ導こうとしている。（ただ、訪問担当者数が少ないため、一人にかかる負担が多いようだ。また、相談員一人が抱えられる人数も限られており、多数を抱えると十分な訪問・相談に至っていないのが現状のようだ）

通級している生徒の進路選び、高校進学について高校の数が多く、どこへ導いて良いか苦労されていた。

高校と中学の違い、システム等について職員の理解が非常に低い。（小・中学校は連携が取れているが、高校とは取れていないことがそれを招いている。）

違いやシステム、制度を理解できれば、通級している生徒にとって良い選択肢が見つかるだろう。

これについては、神戸YMCA高等学院のシステムを交えながら中学生の進路選びについてレクチャーした。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の訪問支援員の説明からも事前研修時に学んだことを重点に置きながら訪問やその後の当事者とのかかわりに活かしているようだった。

実際に各適応指導教室を訪問させていただき、生徒たちの様子や求めていること、指導員の方が求めていることなどが良く分かった。教室の雰囲気や、生徒たちの状況は、本校生徒たちに近い感覚だった。不登校から通級→学校復帰を目指す生徒たちのにとっては、雰囲気の似たわれわれのような学校であれば安心して通うことができると感じた。

中学3年生の進路については、生徒たちも指導員も「どのようなところが良いのか」選びきれず苦勞しているようだった。また、進学していったが、途中退学している生徒も多数居ることだった。

われわれのような民間団体がどこまで繋がって行けるかこれからアプローチすべきことだがつながりを持つことで、中学校と高校が繋がりをもち、不登校経験者や中学生が知っておくべきこと＝小中学校と高校の違い。をしっかりと理解した上で進路選択ができるようにしていきたい。

■研修生レポート（2）

研修内容（概要）

■受入れ団体の行う各事業に関する説明、参加

浜松市精神保健福祉センターにおいては、ひきこもり相談支援事業について、データ等を見せていただきながら現状と課題について説明を受けた。また、他機関との連携の考え方やひきこもり支援の視点等についても、講義の受講及び事例検討への参加、振り返りを通して学ぶことができた。

■当事者グループ体験

精神保健福祉センター、こだまそれぞれの当事者グループ（及びその事例検討会）に参加させていただき、当事者とも交流することができた。

■関係機関の施設見学、概要説明

ひきこもり支援の関連施設として、医療機関、青少年育成センター、障害福祉サービス事業所、地域若者サポートステーション、発達相談支援センター等の施設見学及び事業概要についての説明を受けた。各機関の担当者が顔の見える関係となっており、情報交換等がスムーズに行われている様子を見ることができた。

■アウトリーチ同行

家庭訪問に2回、社会体験協力事業所にて体験中の当事者への訪問に1回、それぞれ同行させていただいた。家庭訪問では、当事者のコンディションが優れず、2回とも本人に会うことはできなかった。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

①当事者支援の必要性和留意点

■当事者グループにおいては、好きな活動について報告するときの参加者の生き生きとした表情や、他メンバーを思いやる、やられる姿などが見られ、相談場面のみでは得ることができない、グループならではの経験を積み重ねることができるメリットは大きいと感じた。

■アウトリーチにおいては、家庭訪問で2回とも当事者本人に会うことができず、家庭環境その他からの刺激に敏感に反応し、容易に変化する当事者の状態像を推測することができた。機動力を持ち、継続的にアウトリーチで関わり続けることができる支援体制の必要性について感じる事ができた。

■社会体験協力事業所への訪問については、当事者が実際に体験を行っている姿を見ることで、当事者グループの場合と同様、相談場面とは異なる姿、特に当事者の強みを見ることができると感じた。また、相談担当者が直接現場に出向いて話をすることで、事業所スタッフとの信頼関係も得られていると感じた。

■一方、精神保健福祉センターでの事例検討会においては、支援者が当事者へアウトリーチを行う際に、家族をエンパワメントするものになるか（パワレスにしないか）という視点で慎重に検討がなされており、当事者支援と家族支援が足並みを揃えながら提供されることの必要性についても学ぶことができた。

②ひきこもり相談支援事業及び関係機関連携について

■精神保健福祉センターにおいて、ひきこもり相談支援事業の現状と課題がデータ等も用いながらしっかりとまとめられていることで、今後力を入れていくべきところも明確になっていると感じた。

■精神保健福祉センターとこだまとの連携については、ひきこもりの一次相談窓口を精神保健福祉センターに限定し、精神保健福祉センターが相談支援の全体を把握しながら、“柔軟な支援が可能”“機動力が高い”“幅広いネットワークを持っている”等のこだまの強みを生かしながら、アウトリーチに関する事業をこだまに委託し、主にこだまに当事者支援の部分を担ってもらっているという仕組みがわかり、それぞれの機関の強みを生かした役割分担、連携ができていると感じた。

■また、精神保健福祉センターとこだまは、文書のやり取りに留まらず、定期的に顔を合わせて事例検討を行うことで、事例の見方（アセスメント）について共有することができ、足並みをそろえて支援や事業展開を考えていくことができているということがわかった。

考察・所感（今後の活かし方など）

■自分の所属と同じ精神保健福祉センターでの実地研修だったため、事業等において類似点が多く、絶えず自分の所属機関と比較検討しながら研修に参加することができた。浜松市精神保健福祉センター二宮センター長の講義の中であった、“ひきこもりの方々の多彩なケース像や変化に富む相談に対応していくためには、支援の多様性を確保することが大切である”というお話は、これまでの自分の経験からも大変納得することができた。

■自分の所属する機関においては、ひきこもり関連事業を一覧として見たときに、当事者に対する支援メニューとして示せるものが少ないと感じる。既存の事業（デイケア）の活用や新規事業（少数当事者グループ）、他機関との連携で強化していく部分など、当事者支援が柔軟に展開できるよう、所属内外でケース検討を行っていききたい。

■所属内で行われているひきこもり支援の実態を把握し、その輪郭を示して行くことが自分の課題だと感じていたが、浜松市精神保健福祉センターの事業報告資料はわかりやすくまとめられており、これを一つのモデルとしながら自分の所属機関におけるひきこもり支援の現状と課題について整理を行っていききたい。

■研修生レポート（3）

研修内容（概要）

- ①精神保健福祉センター及びこだまが行う各事業に関する講義
市内のひきこもり支援の状況だけでなく、長期的な視点にたった事業の実施と各事業同士の関連、地域の支援力向上のための取り組みについても説明を受けた。
- ②浜松市内の支援機関の見学と講義
地域の支援機関が必要なことを積極的に取り組む姿勢や、各機関の連携のあり方について学ぶことができた。
- ③アウトリーチ
自宅訪問や社会体験のフォロー支援の場面の同行だけでなく、医療機関や事業所のアウトリーチの実際についても話を伺うことができた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

- ①アウトリーチ
 - ・必要な支援が届けられず長期化している事例において、訪問することで多くの情報を得て全体を把握できる利点があることが分かった。訪問で得られた経済状況や金銭管理能力、家事能力などの様々な情報から、当事者も家族も必要な支援を提供することが可能と学ぶことができた。
 - ・自宅だけでなく、外出への不安が高い方への外出練習同行など、当事者のニーズに沿う形で柔軟な対応を行うことで、当事者の社会参加への意欲を引き出すことが可能であると学ぶことができた。
 - ・社会体験中にその場で困りを共有し解消することで、当事者が継続できるよう配慮されていた。当事者にとっても、支援者に体験中の姿を見せることで、自然と自己肯定感が高まっている様子を目にすることができた。
- ②センターと支援団体との連携
 - ・当事者と家族それぞれに必要な支援を提供可能な機関が関わることで、相談者のニーズが満たされるだけでなく、互いの業務の効率化にも繋がると学んだ。

・各機関の密な情報交換と事例検討により、支援方針の整理と支援者同士のスキルアップに繋がっていることが実感できた。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修を通し、当事者や家族の本来のニーズを把握するよりも、述べられた困りに沿い支援を組み立てがちであることに気付いた。その結果、必要な支援を得られず停滞する時期が長期化し、変化を望む来所者の意欲を低下させてしまいかねない。当事者が自らニーズを伝えることが困難な場合もあると意識し、支援を検討する必要があると感じた。また、各機関との密な情報共有により当事者に提供できる支援を柔軟に検討することも学び、複数の機関が役割分担をしながら併行して支援を行う必要があると感じた。自身の支援のあり方を振り返るとともに、他機関との連携のあり方についても再検討することができる機会となった。

■研修生レポート（４）

研修内容（概要）

■ガイダンス、ひきこもり事業説明、関係機関訪問：浜松市青少年育成センター訪問・説明、遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-JAN）、こだま、サポステ浜松、メンタルクリニック・ダダメンタルクリニック・ダダ、浜松市発達障害支援センター

■センターミーティング同席

■訪問支援同行（計５名、うち面会は３名）

■当事者会「ゆきかき」、ひきこもり支援事業「こだま」居場所事業に参加・見学

■センター長講話

■ひきこもり支援事業「こだま」月次報告会参加

■カート場「クイック浜名」（株式会社ISK経営）

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

浜松市での取り組みにおいて官民学と協同で行っている点について説明を受けた。各セクターとの距離感の近さに感銘を受けた。特に、NPOが蓄積したノウハウを官民一体で実施できるように提供している点に驚きを感じた。

考察・所感（今後の活かし方など）

官民学とそれぞれのセクター間での信頼関係を強く感じることができ有益であった。課題としては、そのような関係性をどのようにローカライズするかが重要であり、課題でもある。

実地研修では、ひきこもりやニートの支援において、一次窓口としての行政機関、導入・展開フェーズ、訪問支援を行うNPOと、官民協働で行っている浜松市精神保健福祉センターで行った。

浜松市精神保健福祉センターを通して学び得た事柄に関して、顔の見える関係はかなり意識的に体制作りをされており、支援の質、リファーマーにおいてきめ細やかにされていると感じ得た。

センターでは、個別の情報共有をしっかりとされているのが印象的であった。また、ケースミーティングにも参加でき、二宮所長が各発表者、参加者の意見をコーディネートされていた。ケース会議の運営に関して大きな収穫があった。ケースミーティングでは批判的な雰囲気になりやすいが、浜松市精神保健福祉センターでは、所長が意識的にコーディネートされているので建設的・担当者が安心感を得ることにつながっているのを体験させて歌だけたのは大きい。

また、ケースの資料・説明も背景・家族関係・所見とわかりやすく作られており、そのような様式を弊団体にも書式として作成すると、よりケースミーティングの効果が上げることができると思う。

訪問支援に関しては、前期研修とは異なる方針で実施されており、様々な支援のカタチを見ることができた。近年、訪問支援は非常に注目を集めており、その重要性も共有されているが、支援という大きな枠の中では、方法の一つであるという点も改めて確認することができた。近況の確認等が可能な限りできていないと当事者と会えないだけでなく、状態を悪化させる危険性もあるので、対象者の背景や家族関係などの情報、アセスメントの重要性などを同行支援の中で学ぶことができたと考える。

また、本実地研修では、私自身、地域若者サポートステーションの相談員という立場から、PSWr、臨床心理士とは異なる立場から多くのことを学ばせて頂いた。連携において、まずは連携相手を知ることの重要性を改めて実感した。その関係性を維持するために、支援機関・支援

者間で顔のフォーマル・インフォーマルな形でやり取りをされていること。E-JAN・こだま、他の連携機関に「共通言語」があることが大きな発見であった。PSW、臨床心理の領域では当たり前のことかもしれないが、多様な利用者に対して他領域の専門性が必要なサポステでは、非常に大きな課題があると個人的に実感としてある。どうしても、現場・自身のフィールドにこだわってしまい、閉鎖的になってしまうことを再確認できた。

最後に、浜松市精神保健福祉センターの支援において、民間団体がニーズを発見し、次の事業につなげていくお話を聞くことができ、大きな刺激となった。さらに、地域のストレングス、支援機関・支援者個々人のストレングスを把握し、尊重するスタンスは、今後自分自身の支援にとって非常に大きな収穫になった。

■研修生レポート（5）

研修内容（概要）

○アウトリーチ同行

当事者の特徴や興味など情報共有や予定の確認を行った後、アウトリーチ研修に同行させていただいた。

○ボランティア・作業の体験

利用者が実際に行っている作業や日々の行事に参加させていただいた。遊びを通じた関わりで主体性や社会性など身につけ、体験の中で興味のある事柄を見つけ進学や就労に意識を向けていく。

○講義・施設内見学

わたげの会での支援のあり方や、利用者への関わり方や留意点、心構えなどについての講義をしていただいた。施設の中には寮やフリースペースが設けられており、それぞれの利用者の状態に合わせた支援が可能となっていた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

○アウトリーチ同行

利用者の意識を外へ向けるため季節や興味に応じて、外出する機会が設定されていた。外出できなかった時のために本人の興味から屋内でできることをあらかじめ用意して訪問に臨んでいた。雑談の中では本人の知識や興味などを探りつつ、支援者自身の話をして知ってもらうことを心がけていた。また当事者の外出する用事であっても、支援者側の用事のついでにといった形でプレッシャーのかからないようにするといった配慮がされていた。アウトリーチを行うための準備や実際に行う時の留意点だけでなく、当事者を中心とした支援者の態度や心構えについて学ばせていただいた。

○家族支援

ひきこもり状態にある当事者やその家族は疲弊していることが多い。家族はすぐにでもアウトリーチを行って欲しいが、まずは情報収集などを行う。また、勉強会を設け母親や父親で集まれる機会を作り、本人への関わり方や家族内、地域での振る舞い方について情報を発信していく。当事者の家族どうしが集まることで、情報交換や自分一人ではないと思えることでエネルギーを回復していくことがあった。母親勉強会へ参加させていただき活発でエネルギッシュな方が多いことに驚いた。家庭内での表情とは違ったものなのかもしれないが、勉強会等を通して外部との接点を持つことが重要なのだと改めて感じた。

考察・所感（今後の活かし方など）

研修を行う中で家族支援の重要性や、利用者に関わる際の留意点・心構え等を学ばせていただいた。私の所属する施設は今回研修させていただいた施設とは少し質の異なる部分はあるが、家族への支援や当事者への留意点、連携や情報収集など共通する部分で多くのことが得られたように思う。私自身にとっては研修を通して、多様な施設、立場で活動する支援者の方々と関わらせていただけたことが本研修での大きな収穫だった。研修が終わり自身の施設に戻った時に、当事者への考え方や自身の態度のあり方に少し変化があったように感じ、改めて利用者や支援に対する考え方や態度について考える機会になった。

■研修生レポート（6）

研修内容（概要）

- ・ 実地研修先の行う事業に関する講義
引きこもり、ニートの心理、対応等の具体的な理論講座を受講。また、訪問支援者の心理背景・生育過程等の総合的な事前研修、様々な抑えるべき支援ポイントについて講義を受けた。昨今増えている無気力型の若者たちについて等の今後の課題についての講義。
- ・ アウトリーチ同行
自宅訪問及び自宅外での当事者及び当事者の保護者との関わりという場面のアウトリーチに同行させて頂いた。事前情報は移動中牟田光生氏から、後日振り返りとして牟田光生氏、久玉氏から講義を受けた。
- ・ 寮生との運動
- ・ ディスカッションを通じてのひきこもり・ニート等の理解
研修中は寮生と同じ宿泊寮で過ごした。サポステ利用者と寮生とともに、ソフトボールを行ない、運動能力、集団行動の様子を観察した。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

- ・ アウトリーチ
現状把握という見守りの段階に入っているケースであった。3件のうち2件は生活保護者、1件は当事者不在で保護者へのアウトリーチであった。2件当事者に訪問する際には、その方に合わせた場面設定をしており、柔軟な対応をされていた。
- ・ 合宿型自立支援
長い時間引きこもっていた若者達が、少しずつ集団生活している中に自分の居場所を作っている様子を垣間見ることができた。同じ建物で生活しているからこそ、他者に迷惑をかけてしまった若者へのスタッフが行う緊急対応、その若者たちへのケアを大切さを見ることができた。
- ・ 行政との連携
宇奈月温泉という観光地のメリットを生かし、若者たちの働く場所の確保を行政と連携しながら作り上げており、根付いている様子を感じることができた。既存の仕事だけでなく、地域全体も活性化する中間的就労を展開していくというので、参考に出来ればと思う。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修では、所属している団体で活動して接する子ども達より年齢層が高い分、引きこもり期間の長さからくる悩み、本人達の意味では変えることが難しかった環境要因からくる若者たちの悩みの根深さに触れることができた。また、既存の枠に入れることで支援を受けることができる人、その枠に入ることを拒み支援の先が見えない人、まだ枠に入る準備ができていない人、様々な若者たちが居ることを改めて感じた。アウトリーチに限らず、柔軟な対応を立案、実行するためにも、どうすればその人らしく生きていけるか、支援者が用意するのではなく、その人がその人らしく生きていける支援とはどういったものか、支援の在り方を振り返ることができる機会となった。

■研修生レポート（7）

研修内容（概要）

- ひきこもりに関する講義
ひきこもりの現況についての実態・心理的背景・経過・脱却へ という様々な角度からの説明を受けた。実際の過去のデータからの検証を元に考えられたノウハウや心理分析なので信頼性が高く納得のいくものである。
- アウトリーチ同行
自宅訪問の同行をさせていただき、担当者と当事者の会話などから「当事者の気持ちに合わせた関わり方」の特徴が見えてきて大変参考になった。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

アウトリーチ

■訪問することにより、服装などから当事者の生活情報や経済状況を得ることができる・・・食事はきちんとできているのか、寒暖対策ができているのか、ゴミ屋敷になっていないかという生活指導を行う。

■担当スタッフと当事者との会話から見えてくること・・・性格、思考傾向、改善意欲、現状把握ができているか、将来に希望を感じているか

■担当者への安心感、信頼感・・・「これまでの自分のことは分かってもらっている」という安心感があつた。

■当事者が「今困っていること」に焦点を当てていくことでの確かな支援に近づく・・・「今困っていること」として「今不都合なこと」「今直したいところ・物・体」「今欲しいもの、したいこと」などがある。この時点ではカウンセリングよりもまず生活面を整える助言が先決であり、当事者にとっても今必要なことである。

■一人暮らしの場合・・・当事者の身の回りのこと(衣食住)に関心を持つ人がいないので、支援者は健康状態(不都合がある場合、医療機関や行政の窓口への紹介と誘導)や食事情(きちんとできているのか)、経済状況や衛生面などに気を配り、さりげない会話から察していくことにより、本人に必要な支援が見えてくる。

■アウトリーチは来所型に比べ本人を知る手掛かりが大きい・・・支援者は上から目線ではなく同じ高さで会話しながら助言を入れると当事者にとって受け入れやすく信頼関係が作りやすいことを学ぶことができた。これは意外に大事なことだと思う。

■支援する側、される側という枠を外したフレンドリーな付き合い・・・今回のケースは既に信頼関係が作られている上でのアウトリーチだったので、違和感なく会話もスムーズに進み打ち解けていた。

■実地研修では当事者の生活環境や身体状況などから、現在の心理状態や経済的な部分まで推し量ることができる・・・来所型では見えてない「事実」を感じることができる。その中から、支援者がある程度の優先順位をつけて助言ができるので、当事者にとっても「してほしい支援」につながり早い改善が望める。

考察・所感（今後の活かし方など）

これまでは来所型活動が多かったので、この機会を通してアウトリーチ型の「発見の多さ」と「適合支援」のあり方には気づかされることが多くあつた。

当事者の生活状態が見える場所(当事者が拒否した場合は除く)での助言が生きた助言と言えるのではないだろうか。

来所型では当事者の語る言葉からしか読み取れないので、当事者が美化したり逃避化する傾向にある場合は事実と異なる支援になりかねない。アウトリーチ型によって、現場での早期発見と早期対処が可能になることを感じた。今後に生かしたいと思う。

■研修生レポート（8）

研修内容（概要）

■事業概要

・サポステは3か月の期間制限があるが、6か月は必要であるという考えのもとに合宿型自立支援システムを構成し、24名中、13名は合宿しながら就労し、1人は高校通学、10名は訓練生で就労に至っていない。

・合宿型自立サポートコース、教育支援コース、生活保護受給者のための社会的居場所づくり、親の勉強会などを実施。

■アウトリーチ同行

3件(2件は生活保護受給者、1件は2年半行方不明)について、事前に情報提供を受け、実施。行方不明の1件を除き、外出はできているので会うことはできたが、知的問題や性格の偏りから就労へつなげることは困難で、対処に苦慮している状況を理解した。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

■アウトリーチ

・生活保護受給をしていてもそのお金を使わないため支給が打ち切られた事例では、生活のために必要な衣服を買うよう指導しても知的問題からか、そのような状況にはない。夏場でも

自転車を使わず歩いてチラシ配りのバイトをするにも水の補給は公園がある場合などのみで、コンビニなどでジュースを買うことが、もったいないと遠慮して熱中症になるなどの問題がある。もう一つの事例では、対人関係の構築がうまくいかず、トラブルを起こしやめてしまうため、次の就労につなげられないケースであるが、対処に苦慮している状況。

■組織・業務運営等

・引きこもり、不登校、生活保護受給者など様々な人が集い、ふれあいの場を通じて自ら学び自立への道を歩むようなきっかけづくりに寄与している。

・近隣に温泉街があり、協力してくれるホテルもあり、漁協、昆布工場など様々な就労体験ができる。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修を通じて、今までは引きこもり当事者を中心に考えていたが、ここでは引きこもり当事者だけではなく、生活保護受給者や、過去に生活保護を受給していたが自立に向け活動している人や生活保護から自立してスタッフとして働いている人など多様な人が合宿を通じて互いに刺激しあい変わっていく。これは引きこもりだけを対象とした支援では得られない効果を出している。当会においても、初期の段階では、統合失調症などの精神障害者は対象から排除していたが、今は、そのような方も排除することなく対処しており、この方向性は間違いなかったと確信した。

■研修生レポート（9）

研修内容（概要）

■合宿型施設での寮生との交流

当番や作業といった寮生との交流を通して、ひきこもりや不登校をといた困難を抱える若者の自立に向けた一歩やそれを支える環境について学んだ。

■若者サポートステーションにおける支援について

サポートステーション利用者の面接に陪席させていただいた。また、サポートステーションでのアウトリーチケースについて説明を受けた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

■共同生活の中での他者との交流

他者とともに、役割を担当する中で、自然と主体性が回復されていくと感じた。他者との交流や居場所の必要性を実感することができた。

■段階的な自立へのステップ

作業組、アルバイト組と段階があり、自立や就労といった社会参加のプロセスを実際に見て感じることができる環境であった。モデルとなる同様の境遇の若者の姿をみて、自然と動き出せるのではないかと感じた。若者が自立や就労を現実味のあるものとして考えることができるようにアプローチすることも大切であると感じた。

■失敗することにオープンな環境

成功や失敗に対して、オープンな環境であった。一緒に生活する仲間の成功や失敗を目にする機会が多く、他者理解が深まることで、自己理解も深まるのではないかと感じた。そのような交流を通して、否定的な自己評価が改善され、社会参加への動機につながるということを学ぶことができた。

■スタッフと寮生との関わり

寮生の心理的な課題には過度に支援せず、変化を丁寧に見守ることを大切にしていることが印象的であった。

考察・所感（今後の活かし方など）

合宿型の支援を通して、通所支援では見ることの出来ない若者の姿に触れることができ、これまでの自分の支援を見直す機会となりました。成功体験だけでなく、失敗も安全に体験できる場づくりや、相談者が自立までのプロセスを思い描くことができるような支援が大切だと気付くことができました。居場所支援の中で、そういった視点を大切にしたいと思います。

また、モデルとなる他者の存在、同じ境遇の仲間（ピア）の存在も、大きいということを感じました。当事者同士のエンパワーメントの土台をいかに作っていくかということが今後の課題だと感じました。

■研修生レポート（10）

研修内容（概要）

講義やディスカッション形式の研修が大部分を占め、日ごろの活動ではあまり気にしてこなかった組織運営の方法などについて考えることができた。様々な情報をしっかり収集するアンテナを張り巡らせることで、運営資金を捻出する方法や、新しい支援の在り方を考えることができることを学んだ。それと同時に、私共の団体の運営の在り方などについても再度考えさせられる部分もあり、これからの活動の原動力にもすることができた。

また、利用者やスタッフとのかかわりの中で「ピア」について深く考えさせられた。この団体の名前にもある通り、まさにピアサポートの輪が土壌にあり活動がなされていた。ピアという言葉は耳にするものの、ここまで実感できたのはこれが初めてで、とてもいい経験になった。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

一つ目は、社会貢献活動の一環で、ビルの清掃活動に同行させていただいた時のことである。毎日居場所に通っておられる利用者や実習生を含めた5、6人で清掃に出かけたが、行き返りの道中に利用者から街の情報や、趣味についてなど話を聞くことができた。そして、責任感を持って清掃に取り組んでいる様子を見こともできた。

もう一つは定例会である。2ヶ月に一回のペースで行われている会で、現状報告や、事例の考察ができた。また、ピアサポーターとかかわることもでき、ピアな関わりを強く感じる機会になった。

考察・所感（今後の活かし方など）

ピアな関わりという一点にフォーカスをされていたので、それについて考えることができたので、このかかわり方を私共の団体に持ち帰り、うまく生かしていければと考えている。サポーターと利用者間の関わりのみでなく利用者同士の関わり合いがうまくできるようになっていたり、利用者がサポーターとなって関わりをもっていけるような場を今後作っていかないと考えていきたい。

また、他機関との連携の在り方についても本格的に考えていき、利用者を面で支える支援ができるようにも動いていけたらと考えている。

■研修生レポート（11）

研修内容（概要）

◆ピアサポートネットが行なっている事業等に関する講義

設立の経緯や事業理念、地域住民中心型「渋谷ファンイン」を土台とした居場所づくりの連携。「東京都若者社会参加応援事業」による居場所開始（2012,4月）、社会参加開始（2013,4月）、訪問開始（2014,4月）の新規参加事業のノウハウや運営、準備等についての説明を受けた。

◆アウトリーチ同行

回数を重ねたケースについて2ケースのいずれも訪問の導入（15分と30分）部分に同行させて頂いた。ケース①は母親のみの面談、ケース②は本人の顔を見ることが出来た、ピアサポーターと当事者との関係性（距離感等）などの視点を持って訪問に同行することが出来た。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

◆組織・事業運営等

・公的機関と連携し、参加事業を進めることにより、安定した基金がNPO法人の運営を安定させる。その事はどんな相談もまず受ける（ワンストップ型）の支援を支える事となる。

・他者とかかわりを通じて、役に立った、助けられたという経験を共有し、支え合う感覚を通じて当事者を支援する形（有償ボランティア）はとても印象的であった。

◆アウトリーチ

・多くの経験や資格を有した支援者ではなく、ピアサポーター（自助的）が支援にあたる。当事者をひきこもり経験者が支援者として関わることで、家族は未来を見ることが出来るのだということが学べた。

・当事者や家族の要望に応じて、買い物や映画、スポーツ等家庭内だけの支援ではなく柔軟な対応を行っていた。その際どこに行くかは当事者が主体となって決定している。

考察・所感（今後の活かし方など）

当事者が居場所として利用している時間帯についてはどうあるべきなのかを改めて考える機会を得ることが出来た。枠の設定の大切さと難しさをこれからの業務の中で考えたい。

■研修生レポート（12）

研修内容（概要）

○受け入れ団体の行う各事業に関する講義

団体活動の経緯から、事業内容や事業を活用して利用者側から支援者側へ移行するプランニングや家族会（利用者側）の自発的な活動から、利用者支援活動へと繋がるサポートなどを、団体活動の実績として示す事柄や団体運営等についても説明を受けた。

○アウトリーチ同行

理事長、担当者等と共に場面設定による自宅訪問での当事者家族との関わりを訪問同席させて頂いた。

また、ピアサポーター（利用者側から支援者側になった人）と共に、場面設定で自宅訪問での当事者との関わりを訪問同席させて頂いた。

事前の打合せや当事者の状況に合わせた場面設定でのアウトリーチ同行では実際の現場で、事前打合せで得た情報を踏まえて利用者ニーズを主体的に考え、訪問に臨むことができた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

①アウトリーチ

○当事者ニーズに沿った形での場面設定から、家族が抱える諸問題等のニーズをいかに捉えるかという難しさや、団体活動の枠組みのみでは困難なケースにおいては、団体のみで抱えることなく、各機関や各職種固有の役割や枠組みの相互理解を深めつつ、各団体活動の枠組みや各機関や各職種固有の役割や枠組みを提供することで問題の早期発見・早期介入（繋ぐ）ができる柔軟な対応を行っていく必要性を、アウトリーチによって、本人ニーズや家族ニーズなど関わりを持ちながら社会との繋がりを包括的な見通しや見守る協働的な体制づくり（団体活動とニーズに沿った各関係機関等とのネットワークの必要性）を学ぶことができた。

また、支援の展開においては、情報や知識を深めていくことが、重要だということを実感できた。

②組織・事業運営等

○繋がりのある事業展開の受託をすることにより、より様々な切り口の窓口を広げ、個々のニーズに沿える事業展開化とワンストップ化などを地域活動と共に広げつつ、ボランティア育成等既存のマンパワーを上手に組織・運営に活かしながら事業運営されているところが学びになった。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修を通じて、様々な視点で組織的な協働を意識したネットワークを知る（各関係機関・団体等などの特色を理解するなど情報や知識の向上を含む）ことと、当事者ニーズと家族ニーズのズレなど団体活動を通じて、いかに社会との接点に繋げるかという課題がアウトリーチの難しさと課題としての気づくことができた。また、地域活動やボランティア育成等のマンパワーをいかに組織・運営上に取り入れて協働的に様々なアプローチで事業展開していくことが最大の支援策に繋がることに気がついた。

支援者が柔軟性を養いながら、当団体活動として地域性を取入れながら、アウトリーチ支援のみならず当事者ニーズを大切にしながらも支援の見通し（方向性）を当事者と関わりを保ち共有しながら、社会との接点（各行政支援サービス・各団体活動・各専門家等・各企業との連携〔体験/就労等〕・地域活動等）を、当事者の視野（認識）を情報提供するなかで広げつつ、その時、その時必要と思われる資源と一緒に見出し社会との繋がりを深める活動を1人1人が暮らす拠点から広がりを見出すアプローチを考えていくことができる機会となった。

■研修生レポート（13）

研修内容（概要）

「訪問支援の基礎知識・方法論」（ひきこもり支援の現場から）を受講。

「NPO 法人青少年自立援助センター」の事業内容、事例研修。

- ・あだちサポートステーションで生活困窮世帯の訪問についての座学研修
- ・実際の訪問に同行。訪問後振り返り。
- ・多摩サポートステーションの利用者と共にセミナーを受講。
- ・多摩・八王子サポートステーションの特徴説明・事例研修。
- ・八王子サポートステーションの就労準備支援事業を見学。
- ・訪問支援のロールプレイ。振り返り。
- ・施設実習・・・リサイクル用品(ペットボトル)の仕分け。
- ・施設利用者のひきこもり体験を聞く。
- ・研修の総括、振り返り。

実地研修を通して学び得た事柄 (印象的なエピソードなど)

- ・同行訪問の際に頭の中で方法論をシュミレーションをしすぎると目の前にいる当事者を見られないのでポイントだけ絞る点に説得力があった。
- ・支援者と信頼感の上に関係性を持った当事者は自然に話せるものなのだと実感できた。
- ・ロールプレイを通して事例の困難さが体感でき、実践の積み重ねが大切だと痛感した。
- ・ひきこもり体験者の話が聞けて、家族や支援者に対して「申し訳ない」と思っていたりする心情が具体的に伝わってきて当事者目線で考えられた。

考察・所感 (今後の活かし方など)

全体に行政から紹介される困難事例の対応に、支援者の粘り強く諦めない姿勢に感銘を受けた。

当事者と実際に対面して、心の機微や訪問までの事前準備の考え方、配慮の仕方、親子関係や家族の様相が普段の実践である不登校家庭と類似点があり非常に参考になった。親子関係の改善が大きな要素だと感じられた。

当事者を傷つけないように配慮するのは大事だがその時に必要な事は思い切って聞いてみた方が次の展開を進める上で重要だと感じた。

他機関との連携の作り方や進め方が具体的に理解できて来年度からの子ども・若者支援の体制作りや活動に役立てていけると実感した。また実践する勇気をいただいた。受け入れ機関に感謝したい。

■研修生レポート (14)

研修内容 (概要)

①講義

支援の入口から出口まで、様々な事業や関係機関が有機的に繋がっていることの重要性について。また、傾聴に終わらず状況を打開していく支援アプローチの方法について、事例を元に対話しながら学んだ。

②アウトリーチ、ロールプレイ

対象者の事前情報を視覚資料と口頭の両方で確認し、目的と自身の立ち位置を明確にイメージした状態で訪問支援に臨むことができた。また、ロールプレイでは事例を元にアセスメント、支援計画策定、面談を計3回行い、モニタリングを行った事により、自身の支援を客観化し、改善点を知ることができた。

③施設実習

現在、共同生活しながら自立支援プログラムを受講している青年達と一緒に活動した。集団活動の効果を実感すると同時に、生活の至る場面でスタッフによる個別的・計画的働きかけが存在することを学んだ。

実地研修を通して学び得た事柄 (印象的なエピソードなど)

①アウトリーチ

支援者は事前収集した対象者像に沿って、対象者と信頼関係構築を行いながら、次の行動につながる提案と進捗管理を行って訪問を終えていた。また、支援者は言葉を選ぶ時に細心の配慮を行いつつも、最終的には「自分の言葉で伝える」ことを重視しており、その姿勢が対象者を安心させることに繋がっていると感じる場面があった。

② ロールプレイ

自身はつい「対象者と会える」前提で支援アプローチを計画していたが、設定上、一度も会うことができず臨機応変に対応できなかった。様々なパターンで計画しておく事が重要だが、現場では自身の予測を超える事態の方が多い。引き出しと知識を日頃から増やすこと、また経験を理論化して自身に落とし込んでおくことの重要性を実感することができた。

③ 施設実習

寮生達は安心できる関係性の中で、それぞれのペースで自立に向けて前進している姿が印象的だった。同時に、アウトリーチ支援はこうした自立の枠組なくして出口に向かう事はできず、生半可な関わりは却って対象者を失望させるリスクが高い事も学ぶことできた。

④ 組織・事業運営等

組織理念と理論を備えたスタッフが現場の中核におり、若いスタッフがその背中を見て育っている印象を受けた。組織はハードとソフトの両方が揃えば成熟していけるのだと感じた。

考察・所感（今後の活かし方など）

様々な現場を回らせて頂いたが、共通して感じた事は各現場の中核スタッフの力量の高さである。とりわけ支援を視覚化し、共有化し、他者に的確に発信する力が、どの方々も優れていた。その理由として、基礎の理論が存在することも勿論あるが、スタッフ1人1人が現場で若者達と日々葛藤しながら向き合い、その現実を言語化・知識化し、「自分の言葉」に落とし込んでいるからに他ならないと考える。そうしたプロとしての姿勢が、支援者同士を切磋琢磨させ、対象者を安心させることに繋がっている。私もそのような姿勢で今後の実践を積み重ねていきたいと感じ、またチームリーダーとしてそのような強い組織づくりを推進していきたいと思った。支援の視覚化については、今回頂いた資料やロールプレイの経験手順を活用し、自身の団体で効果的に行えるようにしたい。最終日にひきこもり当事者の若者と実際に対話し、支援を受ける前後でどのように感じていたのか、本人の声から聴いた内容についても、今後支援を展開していく上で忘れずにいたい。

■ 研修生レポート（15）

研修内容（概要）

① 受け入れ団体の行う事業や支援理念・体制に関する講義

自立援助センターを中心とする様々な支援体制や現状と支援に関する心構えなどを現実的に即して講義頂きネットワーク支援の根拠や事業開拓の内容が理解できた。また、寮生との共同作業や様々な形での触れ合いができ、当事者の日常的な挑戦に触れる事ができた。

② 支援事業所の見学と講義、グループワークに参加

各事業所での独自の取り組みを具体的に学ぶ事ができ連携の大切さが理解できたとともに、柔軟な支援体制を学ぶ事ができた。

③ アウトリーチ同行（若者自立支援事業の家庭訪問）

訪問における準備や当事者との関係作りの上で支援の具体化について指導を受け、訪問に同行し家庭訪問による保護者・当事者面談に同席。

④ アウトリーチに関するロールプレイと講義

実際の事例を基に実習生が訪問者としての立場でアウトリーチを体験させてもらい具体的なポイントを指導いただいた。

⑤ 寮生の皆さんと一緒に掃除や寮内での作業を体験させていただいた。

⑥ 寮生（当事者）からの体験談を聴かせていただいた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

① 事業所として当事者支援を行う上で「必要なものは作っていく」という姿勢を強く感じた。それが様々な事業展開に繋がり、様々な事情を抱えている当事者であっても必ず支援を深めていく実践になっている事に感動した。支援の流れが家族による相談の「発見」、アウトリーチによる「誘導」、自立支援寮を中心とした様々な居場所や関係事業所や地域の支援団体や自主事業の中での活動「参加」により当事者が自分のペースで日常を過ごし就労による自立という形での「出口」に向かっていく事に寄り添い支援を展開されている事を具体的に学べた。六ヶ月を当事者の動きのワンクールにする目標決めも重要と感じた。

② 自立支援寮を中心に各事業所のスタッフの方々から細やかな指導を頂いた。どのスタッフも支援スタイルは個性的だが、みなさん肝が据わっていた！

「当事者に寄り添う」ということの厳しさと柔軟さを実感した。支援のアフターケアについて質問した時に寮生が自立し退寮する時には「何かあったらいつでも相談にのりよとか遊びにおいで」などとは言わないが退寮する本人の希望があれば寮のサークル的なものや行事に継続的に参加できるよう配慮はしておく。とのお話に、送り出す支援者の当事者の信頼と強い願いを感じた。

③寮生の方々の動きに感動した。ペットボトルのリサイクル作業をご一緒させて頂いた。その中では誰かが中心になり引っ張っていくという空気ではない。ほとんど無言状態なのだが、作業が滞っている箇所にはスッと誰かが動いてきて一緒に片付けてしまう。障害を持っていて言葉では通じにくい相手であろうが、初めて参加する実習生であろうが、ひとり一人に自分の動きでスムーズにコラボしていた。作業しながら自分自身居心地がよく非常に不思議な体験だった。この事は寮の食堂で昼食をご一緒する時や、ほんの短時間の休憩の時にも感じる自然な空気だった。

④同行訪問でのこと、訪問先の当事者がアルバイトを探す必要があった。その訪問の帰り道で早速「この店なら一番条件に合ってると思う」と一軒の店の前で立ち止まってアルバイト募集の張り紙を熟読するスタッフの日常の中の自然な動きに感銘を受けた。当事者が暮らすその地域に足を運ぶ有効性と支援の細やかさを目の当たりにした。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修で「出口の見えない支援は支援にならない」という言葉をいただいた。実習先では動けなくなっている当事者に就労という出口を目標に、ある程度期限も区切った支援を組み立てている。当事者ニーズに響く目標の具体化が当事者の再起動の動機付けに大きく影響する事と、支援期間の明確化も有効性を強く感じた。自分自身の支援スタイルで支援の期限を当事者に明確化する事をあまり意識してこなかったと反省した。スモールステップでの動きを基本に、この事を今後の支援に活かしていきたい。又、当事者の参加・体験のバリエーションも地域の中でこそ開拓していきたい。

また、アウトリーチに関して自分自身は「会えない子供にどうやって会うか？」を課題と考えていたが「アウトリーチは必ずしも会う事が目標ではない」という事も指導いただき、アウトリーチの深さを改めて感じた。裏を返せば、実習前には「会えれば何とか動きを作り出せるはず」と思っていたのは支援者としての自分自身の傲りだったと実感した。アウトリーチによって当事者を支え続けている家族支援と協働、閉じられがちな家庭の中で迷いながらソコにいる当事者への一つの外部刺激としての役割が届けられるよう支援者としてその事を解説もしていきたいし動いていきたいと感じた。また、何でもかんでも一人の支援者が全てを請け負えるはずはなく、支援者の役割分担の明確化と連携こそが当事者の個別支援の柔軟さに繋がっていると学んだ。支援者の熱意だけで支援は進むはずはないが、支援に熱がなければ当事者と共に動く事も不可能な気がした。生活の場である寮を中心に支援の現場にほんの短期間触れただけだったが寮の持つしなやかな熱を感じた。この事も大きな収穫と感じています。

■研修生レポート（16）

研修内容（概要）

■受け入れ団体の行う各事業に関する講義

施設見学、各事業の内容、他機関との連携体制、各事業の目的、困難な点、利点、事業が発展するまでの変遷等の説明。

■アウトリーチ同行

自宅訪問及び自宅外（刑務所、留置所、ディナーミーティング）での当事者との関わり。同行前に今から訪問する当事者の経緯や背景等について詳しく説明を受ける。場合によっては最低限の情報で訪問し、訪問中に観察し気づいた情報を元に経緯や背景等を予測し、訪問後に担当者と一緒に振り返る。

■プログラム参加

カードゲーム、商店街のゴミ拾い、農業体験、車イス清掃、学習会等の活動を通して、当事者と関わる。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

参考になった事業内容

・SSFが複数の「学習支援員」を雇って市立中学校の相談室に派遣されて常駐している。支援が必要な生徒がいれば、学習支援員が直接SSF（子ども・若者総合相談センター＋佐賀市生活自立支援センター＋サポステ）に繋ぐことができるので、生徒や生徒の家庭環境にとって非常に効率のよい早期支援が実践できている

・サポステのプログラムのひとつである、（3週間の就労）「チャレンジ体験」を利用者達が「スモール・ステップ」だと感じてもらえるように、成功体験に繋がるように、事前に施せる細かい「配慮」と「段階」が数多くある。

アウトリーチ

・遠距離訪問も含めて、効率良く一日でなるべく数多くの訪問をするコツ（緊急性の高い訪問で緊急性の低い訪問をはさむ、など）

・カウンセリングなどという名目で会うのではなく、相手が興味を持ちそうなものと自分がオファーできるものを「マッチング」する事が大切。今回は「留学経験がある」「英語がわかる」という要素を「マッチング」に利用して、そこを入り口にして関わることができた。「入り口設定」のバリエーションの豊富さを学んだ。

・常に日頃の何気ない会話の中で「種まき」をしている。いきなり「〇〇しよう！」というのではなく、「あ～じゃ、そのうち〇〇するのもいいかもね～」「〇〇もっと知りたいならまた参考書とか今度調べとくわ～」と言って「匂わせて」みて表情等を観察する。そうする事で「次は何日に訪問しようか？」と直接次をセッティングするのではなく、次回の訪問に「何気なく」繋がっていく（例：そういえばこないだ話してた〇〇のいい教材見つけたんだけど、今度持っていこうか？）

・本人が自分の部屋から出てきてくれない時期でも関係を少しずつ築いていける方法はたくさんある！！（壁越しにやれるゲームや、マンガの貸し借り、など）

・初対面は誰を「入り口」にしてどんな「設定」で会うのが一番いいのか、じっくり事前にプランする事が重要（例えば「英語を教えてくれる人」、「県外から訪問支援を学びに来た人」「パソコンの組み立てに詳しい人」など）

アウトリーチの利用者をさりげなくオフィスでの支援に繋げていく方法もたくさんある。少しひと手間かけるだけで、利用者はずっと来てみやすくなる！例えば、一人だけにカスタマイズされたパンフレットを作ったり、「そういえば最近学習会に△△に超詳しい子が来てるよ、色々教えてくれるかもね。」と「匂わせて」表情を観察したり、興味がありそうだったら、重ねて声をかけてみたり。

考察・所感（今後の活かし方など）

今までは「カウンセラー」として「カウンセリング」目的で会う設定が多かった為、ひきこもっていたり悩んでいたたりして、今はカウンセリングという「設定」には抵抗があるという人達にとっては、どうしても信頼関係や支援が届きにくい、という要素もあったのかもしれない。本人と既に安定した信頼関係を築いている「誰か」の協力を得ながら最初の「入り口」をどのように「設定」すれば、本人に自分の事を「この人ならもうちょっと話してもいいかも」と思ってもらえるのか、を徹底的に事前にリサーチし考え抜いておくことで、本人が感じる不信感だったり抵抗感だったりの多くを未然に防げる事がわかった。「入り口」設定のバリエーションの豊富さと柔軟さは、今回の実地研修で得た一番大きな学びであった。

また困難を克服する事ばかりに焦点をあてず、本人が興味を持っている事を通して、まずはしっかりとした信頼関係を築くことが最優先されるべきである事も学んだ。場合によっては、1時間の訪問のうち55分間一緒にゲームやマンガの話をして、最後の5分で、本当は提案して反応を見たかった事柄をほんのちょっとだけ会話にあげて反応を見てみる、といったペースでの支援も十分に有効である事を確信した。信頼関係を築くために注ぐ労力と時間、そして配慮の細かさは想像を絶するものだったので、今後は何を以って訪問支援を「有効」と判断するのか、についての基準をもっと明確にもつ必要がありそうだ。

そこまでの細かい配慮あるサポートが提供できるのも、スタッフさんたち全員が一分も惜しんで一生懸命働いている姿があつてこそ、だどつくづく感じた。

■研修生レポート（17）

研修内容（概要）

●アウトリーチ同行

支援導入期・展開期・終結期と、時期毎のケースにアウトリーチ同行した。また、ケースの自宅だけではなく、飲食店、留置場、更生保護施設等様々な場所でのアウトリーチについても経験する機会を得た。

●各種セミナー参加

学習会、農業体験、車椅子清掃及び商店街清掃等、受け入れ団体が週毎に行っているセミナーを利用者とともに体験・見学した。

●講義受講

受け入れ団体の事業内容、連携体制、関わる専門職及びアウトリーチの手法等について、事務局長、理事及び相談責任者から説明を受けた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

●アウトリーチ

訪問の行き帰りの相談員のふるまいや利用者との話の展開の仕方等、事前に検討し、その検討手法が組織内で共有されていた。また家族支援の場合、親と子で異なる相談員が担当する等、危機管理がなされていた。

●各種セミナー参加

農業体験・車椅子・商店街清掃は、利用者にとってはコミュニケーション能力を向上させる場、集団での振る舞い方を学ぶ場であると同時に、職員にとっても利用者理解を深める場として活用されていた。商店街清掃では、地域住民に声を掛けられる等、地域に根差した取組みがなされていた。

考察・所感（今後の活かし方など）

高齢者福祉や困窮者領域では、訪問支援は日常的に行われている現状があるが、この度の研修を通して、子ども・若者領域では民間の機関が訪問支援をすることが、長く困難な状況であったことが伺えた。受け入れ団体では、危機管理を徹底し、支援段階毎のアウトリーチ手法を組織内で統一して実践する体制作りがなされていると感じた。ひきこもり支援は慎重さと本人への的確なアプローチが求められる領域である。その意味で、受け入れ団体の支援体制づくりは、ひきこもり支援に有効であると考えられる。この度の研修での学びを、当センターにおける、ひきこもりサポーター及びひきこもりピアサポーター養成研修において伝えていくと同時に、アウトリーチ体制の整備に活用していきたいと思う。

■研修生レポート（18）

研修内容（概要）

■アウトリーチ同行

自宅訪問だけでなく自宅外やセンターでの顔合わせ等、様々な時間帯や場面設定でアウトリーチに同行させて頂いた。いずれの場面でも担当者からの事前情報や課題設定の説明があり、主体的に訪問に取り組むことが出来た。同行後は気づき等を振り返り、訪問支援のノウハウや留意点等、再確認をした。

■受け入れ団体の行う各事業に関する講義

各事業の担当者から、事業内容や対象者、受けられる支援について詳細な説明を受けた。ワンストップ・サービスのため、支援の受け皿を大きく拡げてどのような方でも支援が受けられるような体制づくりをしている。事業連携においても、担当スタッフ間で効率的に実施できるような仕組みとなっている。

■セミナー参加

担当者から事前説明の上、学習ボランティアや内職セミナー、農業体験等に参加し、アウトリーチ以外でも利用者様と接することが出来た。セミナーの考え方や内容等、参考すべき点があり大変勉強になった。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

①アウトリーチ及び支援に対する考え方

・利用者様のニーズに応え、リラックスできる場所での訪問設定がされており、自宅外で一緒に食事を摂りながら行う場面もあった。アウトリーチは自宅訪問が基本というイメージが払拭されたのと同時に、支援者側は柔軟性を持った考え方や行動が必要であることを学んだ。

・“礼を尽くす”という、人として当たり前のことを大切にして支援を行う姿勢に心が打たれた。支援者は知識や経験を深めるだけで決して安心せず、人間力についても考え、身につけていく必要がある。

②組織・事業運営等

・個人情報や厳重で徹底した管理を行っている。一切外部に漏らさない情報管理に対する考え方や体制づくりについて改めて考えさせられた。

・複数の事業の受託をすることで利用者様へのサービス向上を図るだけでなく、事業間連携の効率アップにもつながる。ワンストップ化は利用者様だけでなく支援者側においても非常に効果的な支援であると感じた。

・スタッフが様々な人脈を介して、外部支援機関との繋がりを構築しており、支援をスムーズにしているところも印象的であった。

考察・所感（今後の活かし方など）

大きな実績を挙げているSSFの支援手法（利用者様への接し方、プログラムのあり方など）が自身の方針と合致しており、これまでの活動にブレがなかったと安心するとともに大きな自信となった。今後の活かし方では、私の所属するサポステではアウトリーチの実績がないため、まずはアウトリーチの必要性をしっかりと伝えていきたい。同時にいかに利用者様を来所へ誘導していくかということも課題であるため対策していきたい。また、他機関との連携についても従来の枠にとらわれた古い部分があるため、実地研修での好事例を参考に今後の連携先開拓に努めていきたい。

SSFでは代表の谷口様の理念がスタッフ全体に浸透しているだけでなく、一人一人が支援者としてのプロ意識や揺るぎない信念をしっかりと持っており、非常に熱意ある支援を行っていることが印象的であった。私も改めて支援者としての意識を高く持ち、人間力を上げ、さらに良い支援が出来るよう努めたい。

■研修生レポート（19）

研修内容（概要）

【団体概要説明】

スチューデント・サポート・フェイスが受託している、佐賀・武雄両若者サポートステーション、生活自立支援、子ども・若者総合相談センターの各事業の説明を受けた。また、組織運営や他機関との連携、戦略的人材育成について学んだ。

【アウトリーチ同行】

自宅訪問、ファミリーレストラン、居酒屋など、対象者のニーズに合わせて場所を選び、アウトリーチ同行をさせて頂いた。実際の現場での様々な困難にある当事者への支援のあり方を体験した。担当スタッフから毎回課題設定がされ、当事者との関係性を育む方法や、「同行している研修生」という役割をどのように活用し、援助的とするのかを学んだ。

【プログラム参加】

学習会、農業体験、などへの参加を通して、プログラムをメインとした中での当事者との関わり方を学んだ。また、学生ボランティアの人材育成の方法について学んだ。

実地研修を通して学び得た事柄（印象的なエピソードなど）

【アウトリーチ】

①見立て、介入のタイミング

最初は、親を通しての働きかけを行い、本人の反応を見る。当事者にとって第三者は脅威だったり、ニーズが低いこともあるため、「相談する人」というよりも「情報収集ツール」という役割で介入していく方が良い。同時に親面接を通して、本人の状態を、FDP尺度を用いて丁寧にアセスメントし、その上で必要ならば訪問を行う。一回の訪問で終わらせない為には、次の訪問に繋ぐために、「また会ってもいいかも」と思えるように、余韻を残すことが大切である。

②介入方法のバリエーション

本人の興味、関心をベースに介入する。例えば、ゲームやアニメ、スポーツ、ペットなど。直接的介入が困難な場合は、親を通して間接的に介入していく。面談場所も自宅に限らず、フ

アミレス、ゲームショップ、公園など、当事者の

ニーズに合わせて設定する。その際に、本人のNGなことは避けるように事前情報を分析し、細心の注意を払っておく。枠組みは必要だが、支援者の枠組みで動くことがポイントである。アクティングアウトのリスクも認識しておく。

③伴走型支援

出会いの時に、出口（別れ）をイメージしておくことは必要である。何のために支援をするのか分からなくなってしまうため、意図的な関わりを持つことは重要であり、役割も明確になる。間違えてもいいので、ゴール設定をし、関係づくりの中で、修正をしていく。他機関と繋がるまでは当事者と密に繋がり、不安の軽減に努める。繋がった後はその機関との関係性構築に合わせて徐々に距離を取っていく。

④他機関との関係形成、連携

当事者を次に繋げるためには、信頼できる人を見つけることが必要である。そのためには、普段から積極的にケースを通して働きかけ、関係を構築していくことが求められる。あるいは、施設見学や事業説明などを積極的に行い、相手がメリットを感じられるようにしていく。困り感が共有できると、相手との関係性が変化してくるため、その後の連携にも影響が出てくる。

⑤個人の資質

当事者にとっては、相手が専門家かどうかは対して重要ではないことが多い。当事者に対して「会ってくれてありがとう」という、ワンダウン・ポジションで関わっていくことが大切である。人として、当たり前前を当たり前前にするのが支援者には求められる。その積み重ねが当事者の変化に繋がっていく。

【組織・事業運営】

①空間の工夫

来所する人のニーズも様々である。面談場所だけでなく、居場所のスペースを確保することで、スタッフとの関係性以外にも継続して来所する意欲を高める工夫が重要である。求人票をみることができるスペース、漫画やTV、楽器などが置いてあるスペースなどを作り出すことで、多様なニーズにこたえることができ、言語表現な苦手な当事者との媒介とすることもできる。

②職員の質の維持

月一回休館日とし、その日に全体研修を行っている。主に職員のメンタルヘルスが目的である。テーマとして、ストレスケアの他に、法律や危機管理なども取り扱う。相談件数が多少低下するが、個人の事務作業や、ケース会議も行うことも可能となり、職員のモチベーションや、質の低下を防ぐことを考えると、必要不可欠なものであり、確保している。抱え込みを防ぐため、職員からの個別相談は無記名アンケートを実施後、責任者が全員に個別面談を行い、内部で解決が難しい場合は、総責任者が動く。

③社会資源の活用

ヤングハローワーク、ジョブカフェが2階に入っており、密に連携を取って、フォローすることができている。近隣に体育館や適応指導教室、農地もあるため、個人面接、プログラムで利用したり、顔を見える連携を取っている。大学が近いので、学生を有償ボランティアとして、学習会への参加をしてもらっている。それにより、職員の負担を軽減することができ、雇用にも繋がっていく。

考察・所感（今後の活かし方など）

佐賀でのアウトリーチ実地研修を通して、臨床現場に還元できる多くの収穫を得ることができた。今後の取り組んでいく方針について述べたい。

・アプローチ方法の引き出しを多くし、よりニーズに近づける

今までのアプローチ方法を振り返ってみると、当事者のニーズに近づくというよりも、筆者の土俵上に上がってもらおうとする視点が強かったように感じる。そのような視点が強いと、当事者にとってはハードルが高く感じられてしまい、介入に対して消極的になってしまう可能性がある。今後は、既存の支援方法の中で対応しようとするのではなく、今回得られた知見をもとに、直接・間接的、様々な方法で、筆者の枠で介入していく。アクティング・アウトを防止するために、必ずケース会議にかけ、根拠を持って意図的に働きかける。当事者の臨床像を、FDPの尺度を参考に丁寧に見立て、本人のニーズを探る視点を第一にしていく。介入時には、当事者のニーズに合わせて「相談される人」というよりも「情報提供のツール」としての役割を意識していく。

・他機関との連携、リファー

他機関との関係性が薄いために、連絡することを躊躇してしまったり、自信を持って紹介することができないこともあった。当事者の支援において、一機関で全てを補うことは困難であり、複数の機関が同時に、あるいは繋いでいくことも多い。そのため、社会資源の活用、関係性を作り、保つことは当事者の支援を行っていく上では重要なことである。当事者が目標に安心して到達できるように、普段から気軽に連絡が取りあえるように、関係機関との情報共有を密にし、役割を明確化していく。まずは、ケースで関わっている支援機関の担当者が必要としている情報を把握し、それに基づいて、ケース動向を初回後から定期的に連絡し、変化を伝えていくことから始めていく。

・ボランティアの導入

当所の養成研修を修了したひきこもりサポーターに、集団プログラムへの参加を期待していたが、平日ということもあり、中々参加できる方がいない現状であることが分かった。そのため、学生ボランティアを導入することを提案することとした。今回の実地研修において、学生ボランティアから直接話を伺うことができ、「居場所」というのが、ボランティア自身が活動を継続していく上でのキーワードとなっているように感じられた。どのようにすれば「居場所」と感じてもらえ、なおかつ支援をお願いできるのかは検討が必要だが、先延ばしにせず、来年度から始めることを目標に、今後も積極的に働きかけていく。

■研修生レポート (20)

研修内容 (概要)

■受入団体の行う各事業に関する講義

各事業責任者から、事業内容・予算の獲得・運営・各連携先とのやり取り上の特性・支援上の問題、利用者に通ずる特性等についても説明とノウハウの共有を受ける。

■アウトリーチ支援

当事者・家族等を対象に、自宅訪問・自宅外(飲食店・職場)でのアウトリーチに同行させて頂いた。また、アウトリーチからの誘導(外出・通所・入所)のノウハウも指導頂く。事前に詳しい説明と着目点へのアドバイスを受け、対象者への橋渡しをされた後は、直接的な関りを多く持たせて頂いた。

訪問した方との外出レクリエーションやグループワークの実施。

■就労支援

サポステ事業対象者への、職場訪問や雇用主から状況と問題点の共有の実施同行。対象者との模擬面接・ポスティングの同行・本人が希望する業種や企業へのアプローチ、地域特性を踏まえた就労場所の開拓とのノウハウ共有。

コミュニケーションスキルについてのグループワークの実施。それに伴う誘導への訪問同行。

■同行支援(行政手続き・ハローワーク等)

ひとり親困窮世帯と行政とのつなぎ、育児ノイローゼのある利用者に対するのフォローアップ・就労支援までのワンストップな支援の流れに同行。

■入所・通所者への相談支援

自立援助ホームと、隣接する所長自宅に生活する、入所者と里子の方々との研修期間中、沢山の時間を共有させて頂く。信頼関係の構築と、管理上頻発する問題、その対処と苦悩を体感した。

■各連携先との顔合わせ

行政・保護観察所・警察等の主要な連携先との実績に基づく信頼関係を持った関り、役割分担と共有の流れ、各支援機関との顔が見えるネットワークへの繋ぎの場の提供。

実地研修を通して学び得た事柄 (印象的なエピソードなど)

①アウトリーチ

■事前に対象者の情報を収集し、和やかな雰囲気から日常会話から導入しつつ、就労意思の確認、IADLの観察、健康状態の問診などを実施する流れを体感できた。

■5件の訪問の中で、生活困窮世帯が4件と半数を占めている現状を目の当たりにする。また本人以外の家族が就労しているケースであっても生活保護世帯であり、家庭全体の就労に対する意欲の低下を実感した。

■対象者との会話の中に、発達障害者特有の拘りや違和感を感じるが、総じて手帳等を取得しておらず、病識も薄い。対象者家族に関しても同様の特徴を持っており、世帯全体に対しての福祉的アプローチの必要性を担当者の方も強く感じておられるが、地域に精神病院は1件しかなく、根強い偏見と専門医が居ないと言う現状に苦悩されながの支援である事を実感できた。

②事業・組織運営

■地域社会への継続的な貢献に成り立つ、信頼と他機関との連携、支援協力資源の開拓と拡大を学ぶことができた。

■サポステ・自立援助ホームを幹に、窓口・受け皿を提供し、地域性と、立地を有効利用した青少年サポート事業という非常に重要な役割を果たしている事を学んだ。

■アウトリーチという手法で団体へ誘導し、職員との信頼関係構築後は、入所者同士の小グループへ移行を見守り、就学や就労へと移行させていく流れは、家庭教育の学び直しであり、ピアサポートを提供する居場所であった。

■引きこもり生活から就労や治療に繋がった対象者は、支援途中で家族との関係性に葛藤を抱くケースが多い。困窮世帯・ひとり親世帯から子どもが自立するという経済的問題や、心理的なサポート等へのアプローチも実施されていた。

■自立援助ホームは全国的に定員割れを起こしているのが現状であるそうだが、その所以は、困難事例の受入拒否にあるという。ゆずり葉の郷が常に満床であるのは、非行や自傷他害、引きこもり、自閉症、広汎性発達障害による拘りの強さや他者拒絶などの支援が困難なケースに対しても受け入れを拒否しないという実績があるからこそその満床であると実感した。

考察・所感（今後の活かし方など）

今回の実地研修を通じ、私自身が更生保護という枠組みの中で、入所期間原則6ヶ月という短期間に、支援を急ぎプランニングして来た事を痛感した。

日々の関わりの中での、他者からの承認や肯定、認知の歪みの気付きに対するアセスメント、家庭的な関わりで再構築するモラル等、対象者の傷付いた自尊心のケア無しには、自立は成り立たない事を思い出す事ができた。

またアウトリーチを経験した事で、対象者の家庭、そこに溢れる生きる楽しみや葛藤を投影できた事で、支援の個別化、真のニーズを掴む重要性、家族に対するケアについても再考する機会となった。

家族に見放されてしまった子ども達の、悲しみと怒り、生きる力の強さ、社会性を獲得できる希望を感じ、非行・引きこもりは、子どもからのSOSであり、早期の発見と介入の重要性を強く感じた。

また、その非常に強い、愛情への渴望や怒りを受け止めるには、組織的な支援、多彩なスタッフ構成、専門職との連携が欠かせないものだと思った。

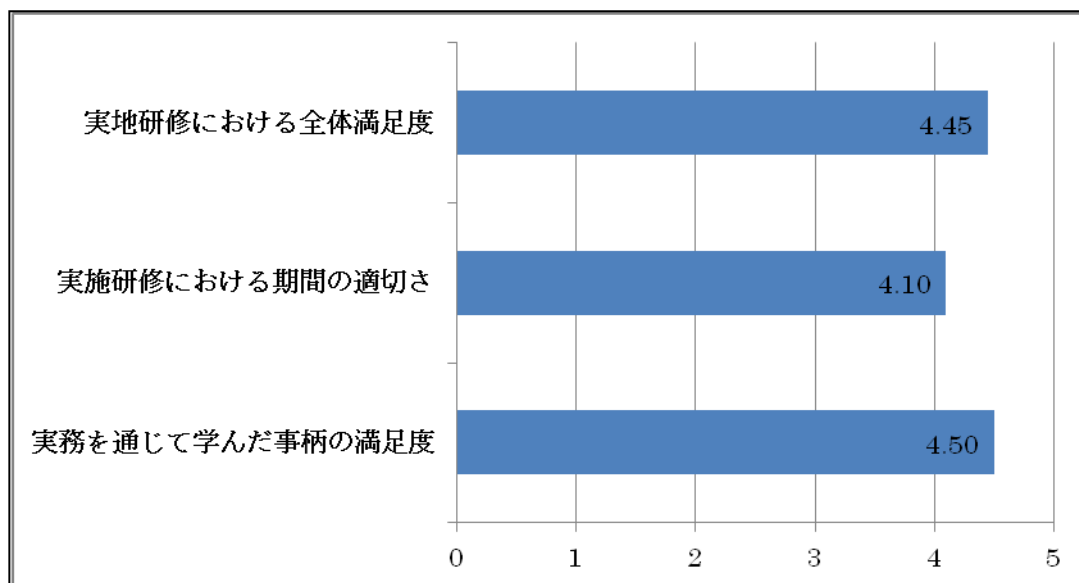
私が所属する施設にたどり着く中高年の利用者の過去に、アウトリーチという形で介入してくる支援者がいただろうか。年齢を重ね更生保護の支援対象者になる前に、青少年期の居場所の提供と寄り添い、早期の介入が欠かせない「入り口支援」なのだと強く実感する事ができた。

また三浦所長から、当事者支援員である研修生の私へ送り続けてくれた「あなたは素晴らしい」という沢山の言葉かけに、ゆずり葉で立ち直って羽ばたいた子ども達が、傷付いた自尊心をトリートメントし自信を持って社会へ踏み出せたという事を、少し体感させてもらえた気がした。

今後、当法人でどのような予算や委託事業を狙い獲得する事で、地域社会に返していく事が出来るのかについて現実的に考えていこうと思う。

実地研修の満足度についてのアンケート結果は図表 10 の通りであった。

図表 10 (実地研修／アンケート結果)



(実地研修における各事項の満足度を研修生が5段階評価(1が最も低く、5が最も高い)で回答したものの平均値を掲載している)